

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：37116

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25862175

研究課題名(和文) 一般病棟におけるがん患者の家族ケアシステムの構築に向けた看護実践プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of nursing practice programs for the construction of the family care system of cancer patients in the general ward

研究代表者

長 聡子 (CHO, Satoko)

産業医科大学・産業保健学部・講師

研究者番号：20441826

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：一般病棟に入院するがん患者の家族ケアニーズをもとに作成した「がん患者の家族ケアに関する学習教材(案)」について、2病院の一般病棟に勤務する看護師12名を対象に試行し、学習教材(案)の内容妥当性、現実可能性、満足度(内容、時間構成)などについてフォーカスグループインタビューを行った。学習教材(案)の内容妥当性、現実可能性では、「看護師からの意図的な声かけでは、個人情報保護の視点も考慮した場面が良いのではないか」、「場面で注目して欲しい部分を強調するなど工夫したほうがわかりやすい」、満足感については「一般病棟の看護師に対する学習教材は30分構成が現実的であり、実現可能と考える」などであった。

研究成果の概要(英文)：Learning materials on cancer family care were developed based on findings from a preliminary study examining the care-related needs of the families of cancer patients admitted to general wards. The developed learning materials were used by 12 general ward nurses working in 2 hospitals, and, subsequently, focus group interviews were conducted to examine the content validity and feasibility, as well as the level of satisfaction with the contents and temporal structure. Regarding the content validity and feasibility of the learning materials, opinions, including: <It may also be necessary for nurses to make active commitments to families from the viewpoint of personal information protection> and <It will be more understandable if points to be noted in each scene are highlighted more clearly>, were extracted. Opinions regarding the level of satisfaction were represented by <Use of these materials is likely to be feasible, as a 30-minute period is within a realistic time frame >.

研究分野：がん看護学、家族看護学

キーワード：がん 家族ケア 一般病棟 看護実践プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

がんの研究や治療が進歩していく中、がん患者はがんとの共存を余儀なくされる一方で、がんが与える影響を受けながら療養生活を送っていかなくてはならなくなった。また、がんから波及する影響は患者だけでなく家族にも及び、がん患者の家族の適応障害やうつ病などの発症が懸念されてきたことから、がん患者の家族への適切かつタイムリーなケアの必要性が指摘されている。

加えて、がん疾患は入退院を繰り返しながら治療やケアを受けていかなければならない疾患特性をもっている。在宅での療養を希望する人々が増えているにも関わらず、家族の負担や緊急時の対応が困難であるなどの不安材料が人々の病院志向を助長させていることもあり、病院施設を中心とした治療、療養を続けているがん患者は未だ多い。

現在、緩和ケア病棟の病床数を考慮すると、がんの一連の病期段階において、入院治療や症状コントロールなどの専門的治療やケアを要するがん患者の大半が病院施設の一般病棟で療養している現状が推測される。

しかし、一般病棟におけるがん患者の家族ケアはいまだ浸透しておらず課題が山積している現状にある。一般病棟では、多種多様の病期段階にある患者のケアを実践することが優先され、患者の家族にまで介入するに至っていない。がんが与える影響を考慮した場合、家族自身も看護の対象としてケアを受ける必要があるものの、家族へのケアは二の次となっている現状にある。一般病棟では、がん患者の家族ケアは浸透しておらず、家族ケアの実践における看護上の課題として、家族ケア実践の浸透、ケアの質向上のための対策が期待される。

特に、一般病棟に入院するがん患者の家族の看護師に対するニーズとして、患者の状況に応じた適切で正確な情報提供や、家族のもつ精神的負担への配慮などを期待し

ており、また、本研究の第1段階で実施した「がん患者の家族による家族ケア評価」においても、患者や家族に対する優しい対応や患者への安全で安楽なケアの実施、看護師からの意図的な声かけや家族のもつ不安への情報提供などの家族ケアを求めている現状にある。

その一方で、がん患者の入院する一般病棟に勤務する看護師の多くが、家族へのケアに関心はあるものの、時間的制約がある中での家族ケアをどのように行えば良いのかわからないなど、がん患者の家族ケアに対する知識やスキルへの課題を持っており、家族ケアの実践評価も低い傾向にあることが報告されている。

このように、多くのがん患者が入院する一般病棟において、がん患者の家族の精神的負担の軽減やさらには家族ケアの浸透や質向上につながる家族ケアシステムの構築は、わが国における喫緊の課題であると考えられるが、これまでに、一般病棟のがん患者の家族ケアシステムに関して確立されたプログラムはない。

加えて、一般病棟の看護師の看護ケア実践能力の育成や実践内容の定着を目的とした現任教育の充実が求められているものの、多忙な業務の中での看護師教育には時間的制限や多重役割などから生じる課題などがうかがえる状況にある。そのような中、看護師教育の基盤体制として導入されているリンクナースシステムは、多忙な業務を担う一般病棟の看護師教育に有効であるとの示唆がみられる。リンクナースシステムは、英国の感染予防対策システムから発展してきたものであり、わが国においても院内感染対策や褥瘡対策、緩和ケア教育などでの導入が実施されている。リンクナースとは、特定の分野について、医療チームの一員として他部門や専門家などと病棟をつなぐ橋渡しの役割を持ち、リンクナース自身が

所属する病棟内で、継続的な教育や指導を担い、病棟スタッフの資質向上に向けた取り組みを担う存在に位置づけられる。

今回、がん患者の家族ケア実践に関し、研究者と一般病棟の看護師との間を介在する橋渡しの役割を担う看護師を選定し、一般病棟の看護師への効果的な学習支援としてリンクナースシステムを参考にした「研究者 橋渡しの役割を担う看護師 一般病棟の看護師」をつなぐ学習プログラムを開発することは、多忙な業務を担う一般病棟の看護師の看護ケア実践能力の育成や実践内容の定着、さらには、一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践の浸透、向上に大きく貢献できると予測される。

以上より、本研究の目的は、一般病棟に勤務する看護師を対象としたリンクナースシステムに準じた「一般病棟におけるがん患者の家族ケアシステムの構築に向けた学習プログラムの作成」(以下、学習プログラム)を行うことであり、一般病棟におけるがん患者の家族ケアの先駆的取り組みである本研究の必要性、意義は非常に高いと考える。

<学習プログラム(案)>

学習教材を用いた研修

橋渡しナース

研修内容の伝達

スタッフナース

本研究ではリンクナースシステムを参考に、研究者と一般病棟の看護師を介在する橋渡しの役割を担う看護師を便宜上、橋渡しナースと定義する。

## 2. 研究の目的

一般病棟のがん患者の家族ケア実践の浸透、向上を最終課題とし、一般病棟におけるがん患者の家族ケアシステムの構築に向け

た看護実践プログラムの開発を行うことである。

## 3. 研究の方法

本研究は「一般病棟におけるがん患者の家族ケアシステムの構築に向けた看護実践プログラム」の開発に向け、第1段階「がん患者の家族による看護ケア評価」、第2段階「一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践プログラムの作成」の研究計画を実施した。

第1段階では、がん患者の家族による看護ケアの質的評価を試みた。第2段階では、一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践プログラムの作成をした。

(1) 第1段階「がん患者の家族による看護ケア評価」

目的

一般病棟に入院中のがん患者の家族が看護師に期待する家族ケアニーズについて明らかにする。

対象

A病院の一般病棟に入院しているがん患者の配偶者3名(50~60歳代の女性)。患者の病期はstage3~4であり、1<sup>st</sup>~3<sup>rd</sup> lineのがん化学療法を受けていた。

データ収集・分析

看護師に対し、どのような家族ケアを期待するかについて、1時間程度の聞き取り調査を実施し、質的分析を行なった。

(2) 第2段階「一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践プログラムの作成」

目的

一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践の浸透に向け、看護師が活用できる学習教材の作成を行う。

対象者

一般病棟に勤務し、がん患者のケアに従事している看護師であり、かつ看護師経験年数3年以上の者12名を対象とした。

なお、2施設を対象とし、1病院3病棟以

上を選出し、1病棟につき2名の看護師を選定した。

#### データ収集・分析

本研究の先行研究で得られた一般病棟に入院するがん患者の家族ケアニーズ（面会時の家族の負担への気づき、看護師からの意図的な声かけや相談役、患者や家族への優しい対応、患者への安全で安楽なケア、家族のもつ不安への対応や情報提供、他職種との橋渡し）をもとに作成した「がん患者の家族ケアに関する学習教材（案）」[以下、学習教材（案）]について、研究対象者12名に試行し、学習教材（案）の内容妥当性、現実可能性、満足度（内容、時間構成）などについてフォーカスグループインタビューを行った。得られたデータは逐語録を作成し、学習教材（案）の内容妥当性、現実可能性、満足度に該当する部分を抽出し、分析した。

#### 【学習教材（案）】

先行研究で得られた家族ケアニーズをもとに考案した家族ケアのシチュエーション場面の動画と各家族ケアニーズについて説明したパワーポイントを取り入れ構成した。学習教材（案）に要する時間構成は30分とした。

#### 4. 研究成果

##### （1）第1段階「がん患者の家族による看護ケア評価」

一般病棟に入院中のがん患者の家族は、家族自身が看護の対象であることの認識がなく、看護師への家族ケアニーズも低い傾向がみられた。また、家族が期待する家族ケアとして、[面会時の家族の負担への気づき]、[看護師からの意図的な声かけ、相談役]、[患者や家族への優しい対応]、[患者への安全で安楽なケア]、[家族のもつ不安への対応や情報提供]、[主治医との橋渡し]の6点が抽出された。治療などの意思決定を迫られている状況下にある家族は、面会時に同室者のこれまでの辛い闘病体験を聞くことが励みになるこ

ともあるが、患者の死や苦痛を連想させるような恐怖につながることもあるなど、看護師に対し、[面会時の家族の負担への気づき]を期待していた。また、家族は苦痛を誰にも相談できず、面会中にふくらんだ不安を緩和させることなく、毎回自宅に持って帰っている状況にあることなどを体験しており、[看護師からの意図的な声かけ、相談役]を望んでいた。

なお、がん患者の家族の抱える苦痛や問題は切迫しており、家族ケアの確実な推進を図っていく必要性は高いと考えられた。本研究を通じ、看護師に対するがん患者の家族ケアの知識や技術の向上に向けた取り組みの必要性が示唆された。

##### （2）第2段階「一般病棟に入院するがん患者の家族ケア実践プログラムの作成」

2病院の一般病棟に勤務する看護師12名に対し、学習教材（案）の内容妥当性、現実可能性、満足度（内容、時間構成）などについてフォーカスグループインタビューを行った。

学習教材（案）の内容妥当性、現実可能性では、「看護師からの意図的な声かけでは、個人情報保護の視点も考慮した場面が良いのではないか」、「場面で注目して欲しい部分を強調するなど工夫したほうがわかりやすい」などが抽出された。また、満足感については、「一般病棟の看護師に対する学習教材は30分構成が現実的であり、実現可能と考える」などであった。

本研究結果を反映し作成した学習教材は、多忙な業務を担う一般病棟の看護師のがん患者の家族ケア実践の浸透、向上に貢献できると考えられ、今後の研究の課題として、本研究結果を踏まえ、リンクナースシステムに準じた「一般病棟におけるがん患者の家族ケアシステムの構築に向けた看護実践プログラム」の確立および普及方法の開発に向けた活動に取り組んでいく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1) 長聡子,川本利恵子,阿南あゆみ,永松有紀:  
「一般病棟におけるがん患者の家族ケア実践評価スケール」の活用有効性の検証, インターナショナル Nursing Care Research, vol.14, No.4, 11-18, November, 2015 (査読有)

2) 長聡子,川本利恵子,阿南あゆみ,永松有紀:  
一般病棟入院するがん患者の家族が求める家族ケアニーズ, インターナショナル Nursing Care Research, vol.12, No.3, 55-62, October, 2013 (査読有)

3) Cho, S., Kawamoto,R :

Development of an evaluation scale for the care of cancer patients' families in general wards, Japanese Journal of applied Psychology, vol.38, No.3, 193-203, 2013. (査読有)

[学会発表](計 2 件)

1) 長聡子,川本利恵子,阿南あゆみ,永松有紀:  
一般病棟に入院中のがん患者の家族が期待する家族ケア, 第 30 回日本がん看護学会学術集会, 2016.2 月 20~21 日,幕張メッセ(千葉県千葉市)

2) 長聡子,川本利恵子,阿南あゆみ,永松有紀:  
「一般病棟におけるがん患者の家族ケア実践評価スケール」の有効性の検証, 第 28 回日本がん看護学会学術集会, 2014.2 月 8~9 日, 朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター(新潟県新潟市)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

長聡子 (CHO Satoko)

産業医科大学・産業保健学部・講師

研究者番号: 20441826